

学校编码：10384
学号：12220141152670

分类号 _____ 密级 _____
UDC _____

厦 门 大 学

硕 士 学 位 论 文

论伪满洲国“民族协和”的真相
——今村荣治笔下的在“满”朝鲜人

偽満洲国における「民族協和」の実像

——今村栄治の描いた在「満」朝鮮人

刘雨薇

指导教师姓名：马英萍 副教授

学 科 名 称：日语语言文学

论文提交日期：2017年4月

论文答辩时间：2017年5月

论文打印时间：

答辩委员会主席： _____

评 阅 人： _____

2017年4月

厦门大学学位论文原创性声明

本人呈交的学位论文是本人在导师指导下,独立完成的研究成果。本人在论文写作中参考其他个人或集体已经发表的研究成果,均在文中以适当方式明确标明,并符合法律规范和《厦门大学研究生学术活动规范(试行)》。

另外,该学位论文为()课题(组)的研究成果,获得()课题(组)经费或实验室的资助,在()实验室完成。(请在以上括号内填写课题或课题组负责人或实验室名称,未有此项声明内容的,可以不作特别声明。)

声明人(签名):

年 月 日

厦门大学学位论文著作权使用声明

本人同意厦门大学根据《中华人民共和国学位条例暂行实施办法》等规定保留和使用此学位论文，并向主管部门或其指定机构送交学位论文（包括纸质版和电子版），允许学位论文进入厦门大学图书馆及其数据库被查阅、借阅。本人同意厦门大学将学位论文加入全国博士、硕士学位论文共建单位数据库进行检索，将学位论文的标题和摘要汇编出版，采用影印、缩印或者其它方式合理复制学位论文。

本学位论文属于：

1. 经厦门大学保密委员会审查核定的保密学位论文，
于 年 月 日解密，解密后适用上述授权。

2. 不保密，适用上述授权。

（请在以上相应括号内打“√”或填上相应内容。保密学位论文应是已经厦门大学保密委员会审定过的学位论文，未经厦门大学保密委员会审定的学位论文均为公开学位论文。此声明栏不填写的，默认为公开学位论文，均适用上述授权。）

声明人（签名）：

年 月 日

摘要

本论文以朝鲜籍作家·今村荣治（1911年-卒年不详）创作的两篇日文短篇小说——《同行者》（1938年6月）、《新胎》（1938年12月-1939年1月）为研究对象、以唤醒伪满洲国时期的相关历史记忆为主要研究目的。笔者立足于相关历史背景之上，对上述两部作品进行文本分析。具体来说，通过聚焦以小说主人公为代表的在“满”朝鲜人的身份认同问题，侧面勾勒出了伪满洲国的社会、文化等实况。尤其是，重现了伪满洲国这一特殊的殖民地形态下、各国人民（特指中、日、朝三国）所呈现的不同的生活状况、精神状态、以及对于伪满洲国、日本帝国主义的真实看法。进而侧面挖掘出日本帝国主义鼓吹的“民族协和”“王道乐土”等口号的骗局本质，揭露其口号背后所隐藏的历史真相，对日帝制造的历史骗局和侵略事实进行深层挖掘。最后，在以上分析的基础上，剖析作者本人对于当时日本所发动的一系列战争、移民、侵略之批判态度，以期得以促使读者重新审视历史，特别是日本帝国主义给东亚人民所带来的灾难，并为今后帝国主义势力的再次抬头敲响警钟。

关键词：今村荣治 伪满洲国 在“满”朝鲜人 殖民统治 “民族协和”

要 旨

本論文は朝鮮系作家・今村栄治（1911年-没年不明）が日本語で書いた短編小説「同行者」（1938年6月）、「新胎」（1938年12月-1939年1月）という二つの文学テクストを研究対象にしたものである。論文の目的は偽満洲国時代の歴史的記憶を呼び覚ますことにあり、歴史資料などを大いに参照しながら文学テクストの分析を行った。具体的には、今村栄治を代表とする在「満」朝鮮人の複雑なアイデンティティーに焦点を絞りつつ、当時の「満洲」の実際の社会的・文化的様相に迫ろうと試みている。日本帝国主義の産物である偽満洲国という独特な植民地形態下に生きる各民族の生活状況、精神状態、「満洲国」観、「日本帝国」像などを探求し、さらには支配者である日本が作り出した「民族協和」「王道楽土」などのスローガンに秘められた実情をも探った。以上のような考察をもとに、日本が生み出した戦争、移民、侵略に対する作者本人の思想を解明することができた。本研究が、日本の軍国主義が東アジアにもたらした災厄を考え直す契機となり、今後も、帝国主義を警戒・監視していく上で、多少なりとも資するところがあれば幸いである。

キーワード：今村栄治 偽満洲国 在「満」朝鮮人 植民地支配 「民族協和」

目 录

| | |
|----------------------------------|----|
| 摘要 | I |
| 要旨 | II |
| 第一章 序论 | 1 |
| 1.1 问题提起 | 1 |
| 1.2 研究对象 | 2 |
| 1.3 文献综述 | 3 |
| 1.4 研究视角及研究目的 | 5 |
| 1.5 在“满”朝鲜移民概要 | 6 |
| 第二章 论《同行者》 | 8 |
| 2.1 关于小说《同行者》 | 8 |
| 2.2 小说《同行者》的研究史回顾及问题意识 | 8 |
| 2.3 在“满”朝鲜人与在“满”日本人的身份认同差异 | 10 |
| 2.4 “满洲”各族人民的相互欺瞒与相互猜忌 | 13 |
| 2.5 从主人公的内心分裂看身份认同政治的无效性 | 17 |
| 小结 | 22 |
| 第三章 论《新胎》 | 23 |
| 3.1 关于小说《新胎》 | 23 |
| 3.2 小说《新胎》的研究史回顾及问题意识 | 23 |
| 3.3 哥哥金相福——从被殖民者到殖民者 | 24 |
| 3.4 弟弟金相俊——在“满”朝鲜农民的缩影 | 27 |
| 3.5 伪满洲国“民族协和”的真相 | 29 |
| 小结 | 32 |
| 第四章 结论 | 34 |
| 参考文献 | 39 |
| 致谢 | 41 |

目次

| | |
|---------------------------------------|----|
| 摘要 | I |
| 要旨 | II |
| 第一章 序論 | 1 |
| 1.1 問題提起 | 1 |
| 1.2 研究対象 | 2 |
| 1.3 同時代評および先行研究 | 3 |
| 1.4 研究視角及び研究目的 | 5 |
| 1.5 渡「満」した朝鮮人移民について | 6 |
| 第二章 「同行者」論 | 8 |
| 2.1 「同行者」というテキストについて | 8 |
| 2.2 「同行者」の研究史回顧及び問題意識 | 8 |
| 2.3 在「満」朝鮮人と在「満」日本人のアイデンティティ認識の食い違い | 10 |
| 2.4 「満洲」に生きる各民族の相互欺瞞と相互猜疑 | 13 |
| 2.5 主人公の内面的分裂から見るアイデンティティ・ポリティックスの無効性 | 17 |
| まとめ | 22 |
| 第三章 「新胎」論 | 23 |
| 3.1 「新胎」というテキストについて | 23 |
| 3.2 「新胎」の研究史回顧及び問題意識 | 23 |
| 3.3 兄の相福——被支配者から支配者へ | 24 |
| 3.4 弟の相俊——「満洲」に生きる朝鮮農民の縮図 | 27 |
| 3.5 偽満洲国における「民族協和」の実像 | 29 |
| まとめ | 32 |
| 第四章 結論 | 34 |
| 参考文献 | 39 |
| 謝辞 | 41 |

第一章 序論

1.1 問題提起

20世紀に入り、帝国主義の階段を着実に上りつめつつあった日本は、朝鮮、中国大陸、台湾などを次々と植民地化あるいは半植民地化したのみならず、ついには「満洲国」なる傀儡国家を捏造するに至った。偽満洲国の誕生は日本の植民地支配をもっとも象徴的に表す出来事であり、それに纏わる文学作品は当時の状況を示す貴重な歴史的証言である。ここ十数年、偽満洲国文学が一部の研究者、読者の注目を集めてきたとはいえ、「満洲国」で活躍した多くの文学者たちは依然として忘却されたままである。しかし、彼らの文学活動・作品は、「満洲国」の社会、文化状況を克明に反映しており、狭義の歴史資料には見られない、文学テキスト特有の具体性や歴史性を帯びている。これらのテキストを詳細に分析することで、単に埋もれていた史料を発掘するだけでなく、従来の歴史研究が見落としてきた細部の問い直しや補充も可能になるだろう。なかでも、日本語で小説を書いていた作家・今村栄治（1911年-没年不明）は、単に「満洲」文壇で活躍していたという事実だけでなく、その複雑なアイデンティティーゆえに、あらためて研究する価値が大いにあると考えられる。本稿では、今村の文学作品に依拠しながら、偽満洲国に関する歴史的記憶を蘇らせ、文学テキストから読み取った情報で歴史的記録を補い、最終的にわが国の植民地史への幅広い関心を引き起こすことを目指したいと思う。

ただし、あらかじめ断っておくと、偽満洲国は台湾、朝鮮と植民地形態が違い、国家の形をした傀儡政権であったため、偽満洲国文学を定義づけることは極めて困難で、未だに学界では定論ができていない。したがって、本研究で取り扱う「満洲文学」とは、偽満洲国の成立から滅亡に至るまでの14年間（1932年-1945年）に、偽満洲国の管轄地域に在住した上で、当時の偽満洲国で作品発表をした文学者によって創作された文学を指すことにする。さらに本稿では、「満洲」、「満洲国」と二つの用語を併せて使っているが、「満洲」は地理的、文化的な側面を強調する言葉で、「満洲国」は政治的、歴史的なニュアンスを

伝える用語として使い分けている。また、「満洲」という言葉は、19世紀に日本人の手によって、民族名ではなく地域名をさす言葉に変えられてしまったため、「満洲」在「満」、渡「満」などの用語を用いる際に、本稿では直用を避けて鉤括弧をつけて使っている。また、「満洲」は旧漢字表記であるため、今日の日本では、「満州」と明記する場合が多く見られるが、本稿では、引用の部分を除いて、全部「州」にさんずいのつく「洲」を用いるようにしている。

1.2 研究対象

本稿では、朝鮮人作家・今村栄治によって書かれた「同行者」（1938年6月）と「新胎」（1938年12月-1939年1月）の二つのテキストを研究対象とする。

まず、今村栄治の生涯に関して、入手した資料^①を整理しながら以下にまとめる。

今村栄治、一説によれば本名は「張喚基」と言われているが、確実な証拠はないようである。1911年に朝鮮に生まれ、1929年夏、長春に移住する。1935年から1937年にかけて日本語作家として「満洲」の文壇に登場し始めた。1938年に入ると、作家としての躍進が始まり、「未完稿」（1938年2月-4月）、「同行者」、「新胎」、「孤児」（1939年4月-7月）などの作品を次々と発表する。1939年、今村は「満洲国」政府の外郭団体、「満日文化協会」の嘱託を任命され、「満洲文話会」の事務員になり、また「文話会」発行の『満洲文芸年鑑』第三輯の著作人代表・発行人にもなっている。1942年12月、「満洲文芸家協会」の書記に任命される。翌年末から敗戦にかけて雑誌『大陸科学』の編集を担当するようになるが、戦後の行方は全く知られていない。

「日韓合併」後、朝鮮半島では一連の同化政策が行われ、強制的な日本語常用、朝鮮語教育の廃止もその一環として実施されたため、朝鮮人作家たちも日本語での文学創作を強要された。それに対して、偽満洲国はあくまでも「民族協和」の「独立国家」であったので、同じ強度の日本語政策が強圧的に実行されずに済み、朝鮮語存続の可能性に賭けることができた。このような理由から、母語創作を続けるために国内での文学活動を断念し、「満洲」へ移住した朝鮮

^①主に西田勝. 今村栄治の内心の世界—「新胎」の解題を兼ねて[J]. 植民地文化研究 (4). 2005、岡田英樹. 文学に見る「満洲国」の位相[M]. 研文出版社. 2000、川村湊. 野川隆・今村栄治・埴英夫作品集 (日本植民地文学精選集 022) [M]. ゆまに書房. 2001. を踏まえてまとめたものである。

人作家は少なくない。彼ら在「満」朝鮮系作家達の大部分は創氏改名をせずに朝鮮語で作品を発表したが、今村はそのような時勢に逆行するように、「満洲」に在住しながらも流暢な日本語で創作を行った。無論、今村のような朝鮮人作家は少数派である。彼らはむしろ日本語でしかうまく自己表現のできない存在であったと言ってもいい。^①資料を調べた限りでは、当時の代表的な在「満」朝鮮人の作品集には今村の小説は一編も収録されておらず、^②その点からも今村の作家としての複雑な立場、位置付けが窺われる。つまり、彼は「満洲」文壇において、一般的な在「満」朝鮮系作家に所属しておらず、かといって正真正銘の日本人作家でもない。そこに彼のアイデンティティーの特殊性、作家としての独自性が浮上する。

これほど興味深い存在であるにもかかわらず、今村は文学研究の現場では今なおそれほど注目されていない。現在入手可能な資料を見ても、創作期間は短く、発表した作品もわずか十数編にとどまる。^③本稿では、作家として躍進しはじめた時期に相次いで発表された「同行者」及び「新胎」の二編を中心に考察していきたい。

1.3 同時代評および先行研究

まず二編のテキストに対する発表当初の評価について、初出不明だが、秋原勝二作の「今村栄治の面影」^④に納められた次の短評が挙げられる。^⑤

^①事実 に即して作られた小説「哈爾濱・新京——引揚者の手記」(竹中正一、1967)に今村栄治に関する次の一節が見られる——「半島人として生まれながら北鮮も南鮮もよく知らず、言葉さえ充分通じないと聞いていただけに、こういう人たちの将来は一体どうなることだろうかと、省三も暗然とする思いだった。」

^②当時、在「満」朝鮮人に向けられた主なメディアは朝鮮語新聞「満鮮日報」の文芸欄であった。また単行本として刊行された作品集は次の通りである：申瑩澈編「在満朝鮮人作品集 芽生える大地」(1941)、申瑩澈編「満洲朝鮮文芸選」(1941)、朴八陽編「満洲詩人集」(1942)、金朝奎編「在満朝鮮人詩集」(1942)。これらの作品集のいずれにも今村栄治の作品は収録されていない。

^③今村栄治の創作の全貌に関しては主に西田勝「今村栄治の内心の世界——「新胎」の解題を兼ねて」[J]、植民地文化研究 (4)、2005、岡田英樹「文学に見る「満洲国」の位相」[M]、研文出版社、2000。を参考にした。

^④秋原勝二「今村栄治の面影」[J]、植民地文化研究 (4)、2005、189。

^⑤この短評の初出や再録に関して、秋原氏は「今村栄治の面影」で次のように言っている。「この年鑑(ここでは『満洲文芸年鑑』第三輯を指す)にも「同行者」が再掲され、年鑑の年度概観小説部門で青木実が「同行者」について私の短評を引用している。忘れていた拙文は、前年創刊の『満洲浪漫』で「同行者」を読み書いたものだが、いつどこに発表したのか思い出せない。」

これは立派な満洲で生まれた一つの完成品である。ここに現れた日本人もさること乍ら、申重欽といふ朝鮮人の、今までここから日本人たらしめてきたため、生活は失ひ、両者の何れでもない深い溝に挟まれ苦悶している心情は充分注目に値する。東洋に起こった国家的変動、民族的移動は、益々この種の間人達を生む可能性が多い時、この作品は磨きがかかった一つの提示を行つている。

ここ十数年、今村の文学作品は一部の研究者の注目を集めるようになってきたが、それに関する研究論文はまだまだ少ないといえる。そこで、今村栄治に関する先行研究を日本と中国に分けて以下にまとめる。

まず日本側の研究状況は、2000年前後を境に二つに大別できると思われる。1990年代には、黒川創編『外地の日本語文学選2』(満洲・内蒙古・樺太)(1996)、川村湊編『文学から見る「満洲」:「五族協和」の夢と現実』(1998)など単なる紹介・解説の段階に止まっていた。それが21世紀になると、今村に関する研究はかなりの発展を遂げ、とりわけ「同行者」への注目度が著しく高まった。柳水晶の『「臣民」と「不逞鮮人」—今村栄治「同行者」に見る民族・移民・帝国』(2006)、尹東燦作『「満洲」文学の研究』の『「満洲」日本語文学における朝鮮人像—今村栄治の「同行者」と日向伸夫の「一時期」をめぐって』(2010)、佐藤華織の『異民・異郷・異心…たとえばムクゲと牡丹の差異 : 今村栄治「同行者」と梅娘「僑民」を例に』(2011)のような研究論文に加え、「同行者」をなんとか世に紹介しようという出版的取り組みも行われた。そのような例として川村湊監修『野川隆・今村栄治・埴英夫作品集』(日本植民地文学精選集022)(2001)、呂元明等『満洲浪漫』(第一輯)(2003)、川村湊編『コレクション戦争と文学16』(満洲の光と影)(2012)などが挙げられる。その他、今村栄治の他の作品や経歴などに関する批評もいくつか見られる。例を挙げると、岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』(2000)、秋原勝二の「今村栄治の面影」(2005)、西田勝『今村栄治の内心の世界—「新胎」の解題を兼ねて』(2005)などが目に付く。

中国の場合、調べたかぎりでは、今村栄治を初めて、それも比較的詳しく紹介したのは、2001年に中国語に訳された岡田英樹の『文学にみる「満洲国」の

位相』（『偽満洲国文学』）であった。その後、中国人の研究者・劉春英が『「新京」時代の日本人作家と作品』（2007）、^①『大亜細亜主義と「大東亜戦争」—「芸文」の第2巻第6号の解説を中心に』（2008）の二つの論文において今村に軽く触れたが、より一層深く研究したのは劉曉麗の『異態時空の精神の世界：偽満洲国文学研究』（2008）だと思われる。ここ二三年、張彤が『今村栄治の「同行者」から見る偽満洲国時代の中国東北像』（2014）、『今村栄治の「出世」から見る偽満洲国時代の中国人の強国意識』（2015）の二編を発表しているが、これは中国において初めて行われた今村栄治の本格的な研究だと考えられる。

1.4 研究視角及び研究目的

前述したように、これまでの先行研究は小説「同行者」ばかりに注目する一方で、どちらかという他作品を無視するような傾向が明らかであった。そもそも今村に関する先行研究の数が少ないからであろう。「同行者」以外の作品を研究する論文はなおさら少なく、管見の限り、張彤の研究以外はまだ見当たらない状態である。むしろ、「同行者」は今村の代表作とされているだけあって研究に値するテキストではあるが、これ一篇だけを手掛かりに、一人の作家の文学活動・思想の全貌を解明するのは困難であるし、偏向の誹りを免れない。なお、本稿で取り扱うもう一つのテキスト——「新胎」は「満洲」の農村を舞台に、在「満」朝鮮人を主人公にした物語である。当時の「満洲」文壇を語る上で見過ごせない良作であると思われるが、それに関する研究はまだ空白のままである。

次に、いわゆるモデル問題である。「同行者」の主人公は作者本人と経歴において類似点が多いため、これまでの先行研究では、小説の主人公を作者本人と重ねて捉える傾向が強く見られた。つまり、本作を作者の実人生が投影された私小説だと思い込み、主人公を作者の分身と読み取り、作者の経歴を手掛かりにテキストを解説しようとする。しかしながら、生い立ちにおいて、両者の共通点が少なくないということは否めないものの、その相違点を考察せずに主人公に作者の姿をただ重ねて読むというアプローチには賛成しかねる。さらには、「同行者」と同年に発表された「新胎」では、テキストの構成のみならず、

^①中国名：《“新京”时代的日本作家与作品》、日本語訳は筆者によるものである、以下同様。

そこに暗喩された国家・戦争・民族といった問題も、「同行者」と深く関係していることは看過できない。両作品を結びつけて考えれば、これまでにない新たな結論にたどり着けるのではないだろうか。

以上を踏まえ本稿では、今村栄治の「同行者」及び「新胎」という二編のテキストを取り上げ、代表作である「同行者」の新たな読み直しに焦点を当てながら、同時に「新胎」のテキスト分析をも行おうと考える。同時期に書かれたこれら二作品を並べて検討し、引き続き全体的な読み直しを試みたい。それによって、今村研究の空白を更に埋め、偽満洲国文学に関する記憶を掘り起こしながら補充や問い直しを行い、最終的にはテキストの背後にある偽満洲国の実像に迫ることができないかと考える。

なお本稿では、従来重視されてきた今村の「朝鮮人」という出自、帰属性をあえて括弧に括り、彼の作品を「満洲国」で日本語で書かれた文学作品であるという視点から検討していくことにする（その理由については、2.2で述べる）。

1.5 渡「満」した朝鮮人移民について

今村栄治本人もそうであるのだが、本稿で取り扱う二編のテキストには、ともに在「満」朝鮮人が主人公として登場している。作品の分析に入る前に、二十世紀初頭から1945年の日本の敗戦に至るまでの朝鮮人移民史にざっと目を通しておく必要があるだろう。本稿では、「満洲」に渡った朝鮮人をめぐる略史を時間軸に沿って以下のように整理してみた。

まず清朝時代、「満洲」地域（主に東北三省を指している）は女真族の発祥地であるため、「禁封の地」として異民族の移住は厳禁されていた。それゆえ、「満洲」は面積の広さのわりに、人口密度が大変低い地域であった。しかし、朝鮮国内で政治機能不全、旱魃などが頻発し、一部の朝鮮農民は生計のために国境を越えて大陸続きの「満洲」に逃散してきた。特に、清朝側の「満洲」封禁令が撤去されて以降（1883年頃）、「満洲」に流入した逃亡農民の数は爆発的に増加し、それに伴った中鮮間紛争もあとが絶たなかった。

日露戦争後、戦争に勝利した日本は朝鮮人が集まり住んでいる中国東北南部地区を勢力拠点にし、「満洲」全土への「進出」を図った。さらに日本側に有利な「間島条約」が締結された。そうしたなか、日本の処置に抗うために一部

の朝鮮人は「満洲」内地に深入りし、抗日独立運動を頻繁に展開していた。朝鮮を併合したのち、「満洲」の支配を目論む日本は、朝鮮移民を侵略政策の道具として「満洲」に送り込んだ。具体的には「日本人を朝鮮に、朝鮮人を満洲に」^①という方針を取り、在「満」朝鮮移民を急速に増加させた。またこの時期、朝鮮半島の植民地支配で零落し、貧しい生活に耐えかね「満洲」に流入した農民も多数見られる。1920年までに、「満洲」にいる朝鮮人人口は459000人に達していた。

時代を少し下って偽満洲国時代になると、朝鮮人共産主義者による反日武装戦闘が「満洲」において幕を開けた。彼らは中国人共産主義者と密接な連携を保ちつつこの地で熾烈な戦いを繰り広げていた。また、日本人の「満洲開拓団」を量的に補充するために、朝鮮人「満洲開拓団」も連携して大量に送り込まれた。さらに1934年に朝鮮人農民の「満洲」への「強制連行」が実施され、1945年の終戦までに約25万人の朝鮮人が苦難の生活を送ることになった。

^①中国語原文は「日人移韓，韓人移滿」である。日本語訳は筆者によるものである。

第二章 「同行者」論

2.1 「同行者」というテキストについて

短編小説「同行者」は、1938年6月『満洲行政』の文芸欄に発表され、後に『満洲浪漫』創刊号（1938年10月）、『満洲文芸年鑑』（1938年12月）（第三輯）に再録されるなど、当時の「満洲国」の日本語文壇では注目を集めた今村栄治の代表作である。1990年代から、黒川創編『外地の日本語文学選2』（満洲・内蒙古・樺太）（1996）、川村湊監修『野川隆・今村栄治・埴英夫作品集』（日本植民地文学精選集022）（2001）、川村湊編『戦争と文学コレクション16』（満洲の光と影）（2012）に相次いで収録され、再び注目を集めている。

「同行者」の粗筋は以下のようにまとめられる。1931年8月末、長春の朝鮮宿屋に滞在している一人の男が生活に行き詰まりを覚えていた。名は申重欽。朝鮮人であるが、本人は完全に日本人に同化していると感じている。そんな彼にとって、「満洲」の農村で百姓をしている長兄一家に身を寄せるのは、現状を打開する選択肢の一つである。だが、「あらゆる点で完全な日本人になっている」自分がそのような「原始的」な生活に耐えられるか自信がなく、心を決めかねている。やがて、宿屋の老人の紹介を通じて行き先まで同行する日本人が見つかったことを契機に、申は「満洲」の農村への「逆行」を決意する。出発当日、「支那服」に着替えた申は同行者の身につけている朝鮮服に意表を突かれ、それを目障りに思う。途中で「不逞鮮人」がたくさん巢食っていることを同行者に明かされた申は、日本人と朝鮮人の狭間に立つ自分の立場を痛感させられる。やがて、前方に待ち伏せている「不逞鮮人」が目に入り、同行者は申が彼らと「グル」ではないかと疑い、ピストルを持ち出して申に突きつける。民族と民族との狭間を再び思い知らされた申は憤怒に駆られ、相手のピストルをもぎ取る。そして、ピストルを構えたまま、近寄りつつある「不逞鮮人」たちを涙ながらに睨む。

2.2 「同行者」の研究史回顧及び問題意識

まず、「同行者」に関する中日両国の先行研究を時代順に並べて次の図表に示す。

表 2.1 小説「同行者」に関する先行研究

| 国別 | No. | 著者名 | 発表年 | 文献名 |
|----|-----|------|------|--|
| 中国 | 1 | 張彤 | 2014 | 今村栄治の「同行者」から見る偽満洲国時代の中国東北像 |
| 日本 | 2 | 柳水晶 | 2006 | 「臣民」と「不逞鮮人」：今村栄治「同行者」に見る民族・移民・帝国 |
| | 3 | 尹東燦 | 2010 | 「満洲」日本語文学における朝鮮人像—今村栄治の「同行者」と日向伸夫の「一時期」をめぐって |
| | 4 | 佐藤華織 | 2011 | 異民・異郷・異心…たとえばムクゲと牡丹の差異—今村栄治「同行者」と梅娘「僑民」を例に |

上に挙げた先行研究のうち、論文3は、主人公を作者本人と重ねて捉える傾向が強く見られる。つまり、申を作者の分身と見なし、申のアイデンティティーの問題はすなわち作者自身が抱えていた問題であると論じている。確かに、生い立ちやその他の特徴においても、両者のあいだに共通点は少なくない。とはいえ、相違点をまったく考察することなく主人公に作者の姿をただ重ねて読むというアプローチには無条件に賛成しかねる。

また、論文1と論文4は、テキスト精読を通し、当時の「満洲」における植民地支配の配置を読み取ろうとし、さらに作品を題材にして当時の歴史に還元しようという研究姿勢が見られるようだ。いうまでもなく、文学テキストを通してその背後にある歴史を解き明かすというのは、今日においては非常に重要な研究方法である。ただ本稿の立場としては、文学テキストならでの可能性を尊重し、特有の語り口や物語のプロットに注目し、文学テキスト独自の方法でしか表現できない心情、アイデンティティー問題などを見出したい。

最後に、論文2をはじめとするすべての先行研究に言えることだが、ほかの

Degree papers are in the "[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)". Full texts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to etd@xmu.edu.cn for delivery details.

厦门大学博硕士论文摘要库